令和８年度第１回北海道立近代美術館協議会　議事録

１　日　時

令和８年（2026年）８月５日（水）13:30～15:50

２　会　場

北海道立近代美術館　３階　会議室　（Ｗｅｂ会議システム（Ｚｏｏｍ）併用）

３　出席者

（1）委　員

大石朋生、北村清彦（会長）、木村寿賀子、霜村紀子、中井令、野尻敦子、長谷川宏美、藤島尚子、堀口基一、三橋純予（Ｗｅｂ会議システムによる出席）、吉崎元章（副会長）（計11名）（欠席：千葉徹）（敬称略・五十音順）

（2）事務局

ア　近代美術館

立川館長、北川副館長、村山学芸副館長、髙橋総務企画部長、大下学芸部長、青山総務企画課長、谷内山主事

イ　三岸好太郎美術館

本吉副館長、井内学芸員

ウ　教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

浅野道立近代美術館担当課長、富田課長補佐

４　傍聴者

なし

５　議　題

（1）近代美術館

ア　令和７年度事業実施報告及び美術館評価について　…… 資料１－１

イ　令和８年度運営計画について　…… 資料１－２

（2）三岸好太郎美術館

ア　令和７年度事業実施報告及び美術館評価について　…… 資料２－１

イ　令和８年度運営計画について　…… 資料２－２

（3）近代美術館・三岸好太郎美術館

北海道立近代美術館リニューアルに向けた検討状況について　…… 資料３

６　開会挨拶

【立川館長】

協議会の皆様、本日は、ありがとうございます。挨拶に代えて、若干、私の認識をお話ししたいと思います。

本日の議題である近代美術館のリニューアルですが、現状、多くの問題、課題を抱えています。その一つは、時間の問題、スピード感の問題です。令和８年（2025年）３月に基本構想が公表されてから１年半近く経過しましたが、基本構想の次の段階である基本計画は、まだできておりません。当初の予定では、今年の３月には基本計画ができると聞いていたのですが、それが今では、計画策定は、１年遅れの来年の３月までとなっています。基本構想から計画策定まで、２年掛かるということになります。

一方で、有識者会議での計画の検討は、現在まで、さほど具体的に進んでいないように思います。なぜ、この予定がずれ込んでいるのかと言いますと、内部調整に時間が掛かっているためです。内部調整というのは、道教委と知事サイドとの調整です。具体的にどんなやりとりをしているのか、近代美術館としては、正確に分かりません。

いろいろな角度から検討することは必要だと思います。ただ、近代美術館の場合は、特別展が来年度で休止となります。リニューアルオープンが遅れれば遅れるほど、特別展のない空白期間が長くなってしまいます。これまでのスピード感は、近代美術館としては大変残念な状況だと思っています。

また、リニューアルの中身についても、課題があります。現在の建物を使う改修方式ですので、もちろん、いろいろな制約があります。また、基本構想では、休館期間は２年間となっていましたが、本当にそれで済むのかどうか、それから、収蔵庫をどうするのかということも、よく検討する必要があります。さらに、基本構想では、この建物の文化財指定を目指すとしていますが、美術館の機能強化と文化財指定が両立するのかという問題もあります。

近代美術館としては、これ以上、時間を無駄にしないでほしいと思ってます。その一方で、安易で乱暴な結論とならないことも願っています。

リニューアルについては、後ほど、議論の土台となる昨年３月の基本構想の概要も含め、現時点の状況を説明する予定です。

本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。

７　職員紹介

事務局から、令和８年（2026年）４月人事異動により着任した職員（北川副館長、髙橋総務企画部長及び大下学芸部長）の紹介を行う。

８　議　事

北村会長の進行により議事に入る。

（1）近代美術館

ア　令和７年度事業実施報告及び美術館評価について　…… 資料１－１

イ　令和８年度運営計画について　…… 資料１－２

（ｱ）事務局から資料１－１及び資料１－２について説明

（ｲ）質疑・意見

【北村会長】

最初に、事務局から美術館評価についての説明がありました。美術館評価については、単なる評価のための評価ではなく、ＰＤＣＡサイクルをうまく回して今後につなげていこうという考え方で、３年ほど前に改正したものと認識しています。評価の中に「今後の対応方向」という項目がありますが、今後、欠けている部分、足りない部分をどのように前に進めていくのかという観点で、このような項目を設定しているものと思います。

ただ、結果として、その後の評価も、あまりうまくいっていないと言いますか、高い評価が出ない仕組みになっているということであり、見直した方が良いのではないかということで、現在、所管課に検討を進めてもらっているという説明でした。

定量的な項目は評価しやすい一方、定性的な項目は、なかなか数値に出てこないので、評価の仕方がとても難しいです。そこで、定性評価と定量評価を掛け合わせた上で、ＡＢＣＤで評価をしましょうということになったのだろうと思いますが、実際に評価した結果、Ｃ評価などが出てくると、委員の皆様から「何でＣなのか。」という御意見が多々あったというのが、これまでの経過だと認識しています。

令和７年度（2025年度）の事業に関しては、前回、前々回の協議会でも、常設展の「1945-2025 美術館は何を記憶しているか」について、大変素晴らしい展覧会であったと協議会の皆さんから高い評価を受けていますし、特別展の「イワタルリ展」についても、大変立派なものであったという評価を受けています。結果として、常設展の観覧者数が6,000人近く増えたということですが、特別展は若干減って、合計では、年間を通じて3,000人ほど観覧者数が少なくなってしまったということだろうと思います。常設展の観覧者数が増えたというのは、近代美術館の方々の努力であり、学芸の方々の研究の成果が展覧会に表れているということだろうと思います。大変素晴らしいことで、敬意を表したいと思います。

今年度は、道単独の特別展が一つで、その他は、貸館展や実行委員会展ということです。もちろん、道単独の特別展だけに学芸員が関わっているということではなく、常設展には年間を通じて関わっているのでしょうが、近代美術館が単独で関わっている展覧会は、冬の時期に集中しているように見えてしまうのかなと思いました。

理想としては、近代美術館の企画した展覧会を全国に持って行けるようになれば良いと思っています。今年度は、函館美術館コレクションということで、何となく身内で固まってるような感じもしてしまいますが、文字の魅力を伝える展覧会を契機として、「なるほど、書というのは、こういう芸術性があるのか。」、「ポップア

ートとこんな連関をするのか。」、「書とポップアートと混ぜてみると、こんな面白い視点があるのか。」といったことを外に向かって発信できるような形にしていただくと、道単独の特別展も、より魅力が出てくるのではないかと思います。

冬の寒い時期の開催ですので、観覧者数がどうなるのかが懸念されるところですが、せっかく札幌国際芸術祭もあることなので、世界に発信していけると面白いなと思いました。

【大石委員】

北村会長のおっしゃるとおりで、僕もそう思って聞いていました。

雪の展示というのは、道内の人よりも道外の人たちの方が魅力を感じるのではないかなと思います。僕は、道外の人間なので雪は大好きですが、北海道の方が雪をそこまで好きかというと、むしろ割と嫌がる方もいるのかなとも思いますので、見せ方を工夫しながら道外に発信していくというのが、すごく重要だろうと思います。

あと、もう一つとして、インバウンドの影響で外国の観覧者が増えており、それを踏まえて、日本の美術の展覧会も結構開催されていますが、このことをとても評価していて、今後も継続的に開催していただきたいと思っています。福井爽人先生、また、他の北海道在住の作家もそうですが、見せ方や切り口によって作家の見え方は変わってくると思いますので、工夫しながら、道外向けに視点をシフトして取り組んでいただければと思います。

【北村会長】

ウポポイでは、インバウンド対応について、どのような工夫をされていますか。

【霜村委員】

ウポポイは、オリンピックを目指して開業したという経緯があるので、当初から多言語に関しては対応していたのですが、それがやっと生きてきたというところです。展示解説も、研究員の中に英語が堪能な者や中国の方、韓国の方もいるので、試みとして、中国語のギャラリートーク、韓国語のギャラリートークというのを時折入れるようにしていたりします。多言語対応については、毎回、必ず英語や中国語、韓国語を付けています。あと、当館の場合、アイヌ語を付けなければいけないという一番の課題があって、そこが他館と違って、とても難しいところです。

【北村会長】

外国の方は、どれぐらいの割合でいらっしゃるのでしょうか。

【霜村委員】

入館者のデータに記載がないので、どれくらいの割合かは把握していないのかもしれません。今度、事務方に確認しておきます。

ただ、見た目にも、明らかに外国の方が増えていまして、展示室も、外国の方々がすごく多くなってきています。

【北村会長】

吉崎さんは、いかがですか。

【吉崎副会長】

質問ですが、インバウンドの数字は、どのようにして地域などを把握しているのでしょうか。

【髙橋総務企画部長】
　チケットを販売する際に、来ていただいた方の外見、また、会話をする中でアジア系なのか、英語圏なのかといったことを判断して把握しています。
【吉崎副会長】
　そういう地道な方法なんですね。常に日本に住んでいる方であったりするかもしれないので、見た目だけでは、なかなか分からないところもあるとは思いますが、数字として大きく外れてはいないだろうということですね。分かりました。
　インバウンド以外のことでは、まず、美術館評価に関わる説明がありましたが、僕も「なぜ、こんなに良い活動をしているのにＢなんだ？」と、ずっと疑問に思っていたんですよね。ようやく、その理由が分かりました。
　評価が何のためにあるのかというと、弱いところや改善点などをしっかりと明確化するということと、もう一つ、職員の士気を高めるということもあるのではないかと思います。そういった意味も含めて見直しを求めているということで、今後にとても期待しているところですが、そのような厳しい中においても、僕が委員に就任してから初めてＡという評価を見た気がするので、とても良かったと思います。
　もう一つ、３ページですが、児童生徒の割合が低下しているということで、広報や周知に課題があるという記載がありました。次の世代に、どのようにつなげていくかということは、どの美術館も課題としているところだと思いますし、なかなか難しいところではあるのですが、子供に直接というよりも、子供を連れてくる親や学校にどう働き掛けていくのかというところが大切と思っています。今、開催している「魔法の美術館」は、アートとしての評価については、いろいろと考えるところはありますが、足を運んでもらうということにおいては、十分意味があるものと思います。
　あと、鑑賞の楽しみや作品の魅力の発見といった点をどのように伸ばしていくかというところですが、札幌芸術の森美術館で、平成20年（2008年）から毎年、「ハロー！ミュージアム」という事業を実施しています。札幌市内の200校くらいの小学５年生を集めて実施しているのですが、もう18年目になり、第１回に10歳で参加した子は、28歳になっています。そこで美術鑑賞の楽しみを知った子たちが親世代になってくるので、この効果が表れてくるのかどうか、これから楽しみなところです。
　それから、我々の子供向けの取組としては、本郷新の伝記漫画を今年２月に発行し、市内の小・中学校、高校、それから児童会館にも配布して、それなりの反響がありました。子供への取組に関しては、即効性がなくても、じわじわ広がっていくことを考えていくことが重要だと思います。「ウィズ・キッズ」についても、長い目で見て取り組んでいくことを続けていただきたいと思っています。
【北村会長】
　三橋さんは、いかがですか。
【三橋委員】
　私が芸術祭関係や教育関係の方々とお話をしていると、やはり、近代美術館が余りにも立派で、少し気後れするようなイメージというのが、まだまだいろいろなと

ころに残っているようには思います。ただ、令和８年度（2026年度）の「わたしのつくりかた」に関しては、近代美術館の評判がとても上がっていて、かなりしっかり調査をされていて、先入観なしにきちんと向き合ってくれていると聞いています。

福祉の方々から、障がいのある方々の展覧会は、連携するときに嫌な思いをすることが結構あるということも言われるのですが、今回の「わたしのつくりかた」に関しては、皆さん好評で、近代美術館がきちんとやってくれているという話を聞いています。

ただ、いろいろな文章、言葉を発信するときに、てにをはの違いだけで、かなり差別的になってしまったりすることも多いと思います。私も共同通信のガイドラインなどを確認しながら文章を書いていますが、そういうことを確認できるような機会になればと思いますし、「わたしのつくりかた」については、すごく期待しているところです。

もう一つ、連携という点で驚きを持って受け止められていたのは、札幌国際芸術祭との連携です。近代美術館の講堂でトークショーまで実施するということで、近代美術館がとても柔軟に、思い切って、連携に取り組んでいるということを、いろいろなところから聞いていますので、そういうことがもっと伝わるようにしていくことが大事かなと思います。

【北村会長】

ポケット学芸員などでは、藤島さんの学校にいつもお世話になっていますが、そのことに限らず、いかがでしょうか。

【藤島委員】

まずは、本校の放送部に活躍のチャンスを与えていただきまして、ありがとうございます。

私も、昨年の「トーベとムーミン展」に行って、たくさんお客さんもいて、大変面白い展覧会だったと思うのですが、「金閣・銀閣　相国寺展」よりも観覧者数が少なかったというのは、少し意外でした。

今、開催している「魔法の美術館」も、子供たちがたくさん来ていて、斬新で面白いなと思いましたし、親しみのある展示というのも新鮮だと思っています。

先ほども出ていましたように、子供のうちに親しんで、長い目で見て育てていくというのは、非常に大事な観点だなと学校現場を預かる者として思っています。そういう意味では、「ポケモン×工芸展」はすごく親しみがあったのかなと思いますし、インバウンドの方も興味があるんだろうなというのは、想像できます。

私も、旅行に行くと、県立美術館など、その土地土地の美術館に行くのですが、そのときに、この美術館は何が強いのかということを、もう少し分かりやすく打ち出してくれていると、もっと行きやすくなるのにと思っているので、近代美術館も、例えば、ガラス展がすごく良いなど、旅行ガイドブックなどにアピールポイントをもう少し出したら良いのではないかと思いながら話を聞いてました。非常に切り口も斬新で「描かれた女性たち」も面白いなと思って観ていました。長い目で見て、育てていければと思います。

【北村会長】

子供のニーズが減っているということですが、堀口さん、いかがでしょうか。

【堀口委員】

私は教員ですので、どうしても教育普及など教育との関わりの部分が気になるのですが、昨年度の美術館評価を見ると、連携協力に関してはＢからＡに、また、教育普及に関してもＣからＢにということで、評価が上がっているのは素晴らしいなと思いました。６項目のうち３項目で評価が上がっているということですが、どちらかというと、ＣからＢに上がるよりも、ＢからＡに上がる方が大変なのではないかなという気がしていました。

美術館評価のお話を伺っていて、ある数値が基準になっていて、そもそもＡ評価にはならない仕組みだといったことは、客観的な根拠に基づく行政評価という観点では理解できるのですが、その一方、正直なところとしては、良いものは良いと評価していただきたいなとも思いました。

評価と評定は違うといったことは、授業などでは思ったりもするのですが、本来の良い評価というのは、もちろん甘い評価ということではなく、プラス思考なのではないかとも思いますので、もったいないなと思って聞いていました。

私は、造形教育連盟という任意団体で授業研究をしていまして、ミュージアム連携部会という研究部会に所属しているのですが、11月に札幌で全道大会があるもので、今、幌西小学校の先生が、「わたしのつくりかた」を観た子供たちが、どのように「わたし」というものを見つめていくかという６年生の授業を作っているところです。連携部会の創設から３年になり、遅々とはしていますが、着実に美術館と子供たちがどのようにつながって、鑑賞の授業がどのように良くなるのかという研究を進めていますので、そういうものを広げていきたいと思っています。そこに関わっている先生方は、美術館や鑑賞に意識が高いと思うのですが、札幌市全体で言いますと、小学校は200校ありますので、もっともっと広げていかなければいけないなと思っています。

今、鑑賞というのは、キャプションを読んで正しい知識を覚えるというようなことではなくて、形や色から受けた感情を自分の見方として素直に表現することで成立するというような、自由な鑑賞、子供主体の鑑賞というのが中心になっていますが、そうした子供たちの意識というのは、肌感覚ではありますが、昔に比べれば、すごく自由で身近なものになりつつあると感じています。子供たちが美術作品やアートに触れるということについては、情報もたくさんありますので、昔に比べれば、わざわざ美術館に行かなくてもということはあると思います。

また、先ほど、美術館の敷居が高いのではないかというお話もありました。子供は、親とセットで行動するものですが、親世代の意識に関しては、もう一声というところまで来ていると思います。まだ、親御さんの世代は、小道が動物園と美術館に分かれていると動物園の方に行きやすい世代なのではないかと思いますが、今、段々と若い親御さんになってきていて、ハローミュージアム経験者など、世代がもう一段進んでくると、子供たちの足がもっと美術館に向くのではないかと感じています。

学校としては、親の意識に働き掛けることもできるのかなと思ったりもしていま

す。ポスターは、どの学校にも掲示されていますし、チケットをいただいたりもしていて、ある程度、子供たちへの宣伝もできると思いますので、協力できたらと思います。せっかく、このような素敵な環境で子供を育てていますので、ぜひ美術に触れ合う札幌っ子であってほしいなと思っています。

【北村会長】

鑑賞の在り方として、今は対話型の鑑賞というのが当たり前になっていて、鑑賞の仕方自体が、大きく変わっているのだろうと思います。

以前、長谷川さんから、美術館の敷居が高いというお話があったかと思いますが、「ポケモン×工芸展」や「魔法の美術館」など、敷居を低くした展覧会が開催されていることについて、どのように感じていますか。

【長谷川委員】

敷居が高いということと、もう一つ、はっきり言えば、魅力が伝わっていないんだろうと思います。先ほど動物園というお話が出ましたけれど、私たちの時代は選択肢が少なく、美術館に動物園や映画館、遊園地くらいでしたが、今は娯楽施設など遊びに行く所が多様になっています。今、美術館は、デートコースや友達と遊びに行くコースに入っているかというと、残念ながら入っていないと思います。それでは、どのように若い世代を獲得していくかというと、美術館の在り方を考えるだけでは難しいように思います。

堀口さんのお話にもあったように、子の親を獲得するというのも方法の一つではあると思うのですが、それだけでなく、三岸好太郎美術館の移動美術館のように、美術館ではないところに作品を持って行って、人の目に触れる機会をどんどん作ることによって広げていくことが、チャンスにつながるのではないかと思います。今回の三岸好太郎美術館の取組については、これからゆっくりお話があると思うのですが、とても良い試みだと思いました。普段、接する機会のない方や関心の薄い方が作品と出合うことで、作品を見て、知って、感じる。もっと見たいと思った方を美術館に誘う、と作品の魅力や美術の鑑賞の楽しさを知ってもらう活動を広げていくことが、来館につながっていくのかなと思っています。

【北村会長】

現在は、残念ながら移動美術館というのがなくなってしまい、代わりにリモートという形になっていますね。

鑑賞に関しては、美術館協力会でギャラリートークなどをされていると思いますが、鑑賞者との関係性で何か感じることはありますか。

【木村委員】

年２回、ボランティアで彫刻清掃を実施しており、近隣住人の方にも声を掛けて、一緒に彫刻清掃をしたらどうかという話があったのですが、今はマンションも多いので、市役所を訪ねて町内会のリストを調べるなどの手間が掛かる作業があり、なかなか実行できませんでした。ただ、そういった方々に声を掛けて、散歩がてら美術館に来ていただくというような方法があっても良いのではないかということは思います。

【北村会長】

美術館という存在を身近なものに感じられるような仕組みが必要ということでしょうか。

【木村委員】

バザーなどをすると、近所のお婆さんがサンダル姿で来てくださって、これを毎年楽しみにしているという話もあって、やはり気にはしてくださっていると思います。ただ、なかなか、一歩入ってくること、絵画を観に来ることが実行できないでいるというのが現実かなという感じがします。

【北村会長】

野尻さんは、いかがでしょうか。

【野尻委員】

親戚の小学１年生と「ポケモン×工芸展」を観に来たのですが、子供の感覚は大人と違っていて、そう思ったらすぐ言葉に出すので、「綺麗。」「これ、いくらで売っているの？」といった感じで、分かりやすく、良いことも悪いことも言葉に出していました。私も感動しましたし、ポケモンは世界的に有名ということもあるので、開催していることをもっと知ってもらいたいなと思っていたのですが、テレビなどでコマーシャルも頻繁に行われていましたし、大人も本当に楽しめました。

今年度の「文字とアート」も、アンディ・ウォーホルが昔から好きなので、ぜひ観たいなと思っています。

また、前回の会議で申し上げたと思いますが、２年後に高等学校ＰＴＡ連合会の全国大会が北海道で開催されることが決まっていて、見込みでは全国から7,000人から8,000人くらい来る予定です。ぜひ近代美術館にも来てほしいと思っていたのですが、ちょうどそのときに近代美術館の改修工事が重なるかもしれないということで、とても残念に思っています。

【北村会長】

中井さんのおかげで、三岸好太郎美術館は、敷居が低いと言いますか、身近な親しみやすい美術館になったと思うのですが、いかがでしょうか。

【中井委員】

そうであれば、ありがたいと思います。敷居が低いということでは、この前、近代美術館で貴重な体験をしました。普段、めったにギャラリーツアーに参加する機会がないのですが、２か月くらい前、「描かれた女性たち」が始まったばかりのときに参加する機会があって、参加人数は少なかったのですが、何人かと一緒に鑑賞しました。

参加したのは全員大人でしたが、説明を聞くだけではなく、皆さん思っていることをいろいろ言いながら鑑賞していて、こんなふうに思いながら鑑賞しているんだなということを感じられる機会となりました。一方的に聞くことだけではなくて、自分たちで好きなことを言ったり、感じたことを意見交換したりしながら観るというのは、なんて楽しいことなんだろうという経験でした。

毎回思うのですが、常設展の「ウィズ・キッズ」のコーナー、ワークシートの内容などがとても充実をしていて、大人でも楽しめる内容になっていると思います。

ワークシートを見ながら、自分では気付かなかった作品の鑑賞の仕方なども分か

るので、とても勉強になると思いましたし、先ほど、課題として、児童生徒の割合が低下しているとありましたが、子供が楽しめるワークシートになっていると思いました。「この下の部分を描いてみよう。」、「彫刻の上の方で何をしているのか描いてみよう。」といったことで、他の人がどのように描いたのかを見られるような参加型になっていたら、もっと楽しい見方ができるのではないかな、リピートで子供たちがまた足を運んでくれるのではないかなと思いました。

　また、先ほど大石さんもおっしゃっていたかと思うのですが、計画の全体スケジュールに関して、冬に雪の展示、夏に夏らしい展示ということではなく、暑い時期だからこそ雪が恋しいなと思ったりすると思うので、夏に雪の展示をしたり、冬に夏の素晴らしさが伝わるような展示をしたりした方が、より北海道の魅力を伝えられるのではないかと感じました。

　あと、美術館評価の見方については、とても詳しく説明していただいたから、なるほどと思ったのですが、何も説明がない状態でこの評価を見て、何も知らない人から近代美術館の評価が低いと思われてしまうのは、とても残念です。早く評価の仕方が変わってほしいなと思いました。

【北村会長】

　エコール・ド・パリ関係の作品収集については、予算面の問題もあって叶わないということが課題としてあって、今年度の運営計画には「計画的かつ現実的」という記載がありますが、これは、できればエコール・ド・パリ関係の作品を集めたいのだけれども、実際には難しいというニュアンスを含めたものということでしょうかね。

【大下学芸部長】

はい。

【北村会長】

　私は、ラジオをよく聞くのですが、ＮＨＫで日本語があまり分からない外国人や子供でも分かるような非常にゆっくりとした口調で、専門用語を使わずに淡々と話すニュースを放送しています。

　私は、中学校の頃から夜にラジオを聞いているのですが、最近のアナウンサーは短い時間に情報を入れようとするからなのか、非常に早口で、私の耳では、とてもついていけないような速さです。もちろん、アナウンサーは、このくらいの長さでこのくらいの分量をという訓練をされているとは思うのですが、私には、ほとんど競馬の実況中継や相撲の取組のような形で話をされているように聞こえます。社会包摂の観点からすると、そのようなところにも配慮すると良いのではないかと思います。

　また、「ポケモン×工芸展」が、貸館ではなく実行委員会形式で開催することになったけれども、負担金の拠出はなかったという話がありましたが、逆に言うと、これだけ観覧者が入ったのであれば、近代美術館に幾ばくかの収入はないのでしょうか。

【髙橋総務企画部長】

　全くないです。

【北村会長】
　貸館料は入らないし、どれだけ観覧者数が伸びても、全部、実行委員会の相手方の収益になるということですね。
【髙橋総務企画部長】
　おっしゃるとおりです。７万人以上の方がいらっしゃって、観覧料や物販でお支払いいただいたのですが、それが当館の収入になっているかというと、全くなっていないということが課題です。
【藤島委員】
　無償で場所を貸しただけということですか。
【髙橋総務企画部長】
　はい。
【中井委員】
　販売の手数料のようなものもないのでしょうか。
【髙橋総務企画部長】
　ないです。
【北村会長】
　これまで、実行委員会形式の在り方として、拠出金を出すことで、赤字になっても損失を被らない一方、収益もないという形で実施されてきていて、これを見直すことについて、これからの近代美術館の在り方検討の中でも議論されていたのですが、このような仕組みでは困るんですよね。実行委員会形式というのは、本来、こういう形ではないはずです。
【髙橋総務企画部長】
　他県では、独自に余剰金や欠損金の取扱いを持っていて、実際に収益を上げている例もありますので、そのような県の例を参考にするなどして、実行委員会展の在り方の見直しを検討するよう何年も前から教育庁に求めているところです。ただ、リニューアルの関係もあるとは思うのですが、まだまだ実現していませんので、引き続き見直しを求めていきたいと考えています。
【北村会長】
　ぜひ、関係部局に強く働き掛けていただければと思います。
【藤島委員】
　今回の「ポケモン×工芸展」の場合、収益があったからもったいないと感じるのですが、逆に大きな赤字になってしまうこともあるんですよね。
【立川館長】
　赤字になることを恐れて、やはり今の方式が良いのではないかという意見もあって、なかなか進まなかったということです。ただ、直営だからこういう話になるのであって、指定管理者が実施するとなれば、また違ってきます。
【吉崎副会長】
　札幌芸術の森美術館では、結構早い時期から実行委員会で折半という形になっていて、多いときには4,000万円くらいが収益として入ったりすることもあるのですが、失敗したときには、1,000万円くらい追加で負担したりということもあります。

そのようになることへの覚悟を持って実施していくということでもありますし、今は共催相手であるテレビや新聞社も、かなり経営的に難しくなってきている中、関連事業で儲けたいという点をどう考えていくかということもあると思います。

あと、地方館での開催の場合、結構な負担がありながらも、文化的な意味合いから付き合いで開催してくれていることもあるので、そうしたこととの兼ね合いの中で考えていかなければならないとも思います。

一筋縄ではいかないこともあるかもしれませんが、美術館が関与して実施していることへの見返りがあって、その見返りを他の活動にも回せるようになるのが一番だと思います。

【立川館長】

６年ほど前、「カラヴァッジョ展」が大赤字になって、そのときには共催相手が負担しましたが、そのような例もあるので、二の足を踏む意見もあって、なかなか進まないというところです。

【北村会長】

本来、これだけの規模の美術館であれば、億単位の費用がかかってくると思いますので、年間予算が4,000万円ほどというのは、とても少ないと思いますし、どのようにして収入を増やすかを考えないと、なかなか持続できなくなってしまうかもしれないと危惧します。

(2) 三岸好太郎美術館

ア　令和７年度事業実施報告及び美術館評価について　…… 資料２－１

イ　令和８年度運営計画について　…… 資料２－２

（ｱ）事務局から資料２－１及び資料２－２について説明

（ｲ）質疑・意見

【北村会長】

令和８年度（2026年度）は、館の改修があるのではないのかということで、とてもイレギュラーな形になっていて、豊平館や北大で移動美術館を実施しています。

これは、ある意味、やむを得ず実施したものだと思うのですが、存外、効果というか、面白みがあるものだとも思います。令和９年度（2027年度）以降は分かりませんが、先ほどもお話があったように、美術館の外で展覧会を行うことが、美術館に対する印象や思いを身近なものにさせてくれることはあると思います。

ぜひ、今年度が終わったときに、移動美術館がどういうものであったのかを検証し、評価して、今後の活動にどう生かしていくのかを考えていただきたいと思います。１年に３箇所も実施するのは、とても大変だとは思いますが、美術館の敷地の中だけではなく、外でもこのような取組をすることによって、社会の中でもっと認知されていくのではないのかなと思ったりもしています。

【吉崎副会長】

豊平館や北大での取組は、本当に良かったですね。豊平館は、三岸好太郎がかつて展覧会を開催した場所ですし、北大の方も、北大との関わりのある作品をしっかりと解説していて、これはすごいと思いました。ぜひ、こういう外へ出て行く取組を続けていただければと思います。

一つ言わせていただきたいこととして、資料５ページに、図書資料コーナーの利用者が減少しているという記載がありますが、美術館にとって図書資料コーナーをどのような位置付けとしていくのかということをもう一度しっかりと考えたほうが良いと思っています。図書を見たいのであれば、図書館の方が専門ですし、最近では、北大に子供向けの図書館ができたりもしています。展覧会の観覧者に対して図書資料をどのようなサービスとして提供していくべきなのか。美術館には、図書館にはないような古い美術書や図録、報告書などが置いてあって、北海道のことや展覧会のことを調べているときに、「ここにあるんだ。」と思ったことも何回かあります。ですから、「美術館でなければ得られない情報がありますよ。」といった、研究したい人たちにアピールする広報の仕方というのもあるのかもしれないと思っています。入館の際に料金を支払わなければならないといったこともありますので、工夫が必要だとは思いますが、考え方の一つとしていただければと思います。

また、三岸好太郎美術館は、助成金を取ることにとても一所懸命ですが、助成金には、助成対象になった翌年度には対象外になるといった縛りがあるものも多いです。助成金を取れば取るほど、その後の何年かは助成対象にならないということもありますので、これからますます大変になってくるとは思いますが、今後も、ぜひ良い企画で取得していっていただければと思います。

そして、参考までに、前回の協議会でお話しした、國松明日香展でクラウドファ

ンディングの結果について、御報告します。目標が60万円で、図録と展示の充実を掲げて募集したところ、150万円以上集まりました。これは、國松明日香さんが、多くの人に慕われていたということが大きな成功ポイントだったと思っています。いろいろな手続など、内部的にも大変でしたが、全国的にも実施している博物館、美術館が出てきていますので、今後、検討しても良いのではないかなと思います。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

クラウドファンディングは、業者に外注したのでしょうか。

【吉崎副会長】

外注です。ＲＥＡＤＹＦＯＲという会社で、国立科学博物館などの公的機関との実績もあるところです。手数料が14パーセントですが、目標に達しなくても、集まったお金は、手数料を引いた上で全部もらえるが良いところで、その点では、使いやすいのではないかと思います。公的機関との実績もあるので、手続面のことも理解していて、やりやすかったですね。

【大石委員】

外部資金をものすごく積極的に獲得していて、頭が下がるなと思っています。資金的に潤沢ではない美術館であることを自覚して、危機感を持って取り組んでいながらも、悲壮感がなくて非常にポジティブですね。喫緊の課題などと言われると、どんどん窮屈になってしまうと思うのですが、新しいことに取り組んでいて、美術館評価でも「多様な主体との連携・協力による地域の活力向上」がＡであるというのは、一番大事なポイントかなと思います。三岸好太郎美術館の成り立ちを表していると思いますし、素晴らしい活動をされていると思います。頑張ってください。

【木村委員】

私も、７月４日に北大で井内学芸員の解説を聞いてきました。20人程度、聴講者を集めるということだったのですが、実際には40人ぐらい集まって、とても盛況でした。良い雰囲気の中で作品が飾られていて、とても良かったなと思いました。

【北村会長】

老朽化に関しては、三岸好太郎美術館も困った事態になっていますね。万が一、事故などが起こると、とんでもないことになると思いますので、人に対しても物に対しても、ぜひ、予算を措置する側がきちんと面倒を見るようにしていただきたいなと思います。

本当にいろいろな活動に取り組んでいて、いつもすごいなぁと思っていますし、精力的に活動していることに敬服しています。ただ、それが学芸員の自己研さんによって行われているというのが、何とも切ないところです。

(3) 近代美術館・三岸好太郎美術館

北海道立近代美術館リニューアルに向けた検討状況について

(ｱ) 事務局から資料３について説明

(ｲ) 質疑・意見

【北村会長】

これまで「これからの北海道立近代美術館検討会議」が19回開催され、私も出席しているのですが、改修・増築するという案に決まって、今は、どこに、どのような部屋を置いて、どのような機能を持たせるのかといったことを検討する段階にあります。

検討当初は、ほとんどスケルトンのような形で、建物の内部を壊し、いろいろな部屋を作ることを考えていたのですが、その後、建物の構造的な問題があって壁を壊せないということが分かってきて、ほとんど不可能ということになりました。ただ、元々、改修・増築案であっても、基本構想のビジョン、ミッション、コンセプトを実現できるということがあって、改修・増築案に決まった経緯があるので、それは、しっかり実現してもらわないと困ると思っています。

また、近代美術館が建設から50年経って、この先、文化財に指定されるかどうかは分かりませんが、保存するところと新たに作り変えていくところの兼ね合いと言いますか、どちらが大事なのかということもあります。例えば、極端な話として、そうはならないとは思いますが、建物を全く変えずに、このままの形で保存しなさいということもあるのかといったことです。今のところ、収蔵庫を新築し、入口側に建物を増築することによって、ビジョン、ミッション、コンセプトを実現することにしましょうということで、明後日の検討会議で、どのような機能を持った部屋をどこに配置すれば良いのかということを議論すると聞いています。

ただ、館長がおっしゃったように、スピード感がないというのは、そのとおりで、その原因の一つとして、隣の知事公館と一体化して進めなさいという大きな方針がある一方、知事公館は知事部局で、美術館は教育委員会で、別々に議論していることがあります。

仄聞（そくぶん）するところでは、知事公館については、議論が進んでいるようですが、例えば、美術館側の案の一つとして、ガラスのコレクションを何点か知事公館で展示することもあり得るかなと思っても、知事公館側としては、現在も行政の実務で使用し、機能しているところもあるので、接待機能、また、歴史的文化財としての活用をどうするのかということは念頭にあっても、美術館側とのコラボレーションにはあまり積極的ではないといったことがあります。

別々に案を立てているので、案を一体化するというのが難しくて、結局、三岸好太郎美術館も含めたこのエリアで様々なイベントを行うと言っているけれども、誰が主体となって行うのかについては、私にはよく分からないということをお伝えしておきます。

現在の検討会議の課題として、一つは、私は回遊性を高めてほしいと言っているのですが、近代美術館をどのように増築し、どのような諸室配置にするのかということ、もう一つが、エリア一帯の魅力向上のためにどのような施策があるのかとい

うことかなと思っていますが、浅野課長、いかがでしょうか。
【浅野文化財・博物館課近代美術館整備担当課長】
　概ね、おっしゃっていただいたとおりです。冒頭の館長からの御挨拶にもあったとおり、昨年度から基本計画の策定に取り組んでいて、かれこれ１年３か月くらい経っている状況です。論点となっているのは、北村会長がおっしゃったとおり、隣の知事公館との関係で、このエリア全体をどのように生かしていくのかという話ですが、これは、道の総務部と話をしながら進めていく必要がありますので、その調整をしながら、近代美術館をどのようにリニューアルしていくのかという議論をしています。資料の最後にも記載がありますように、道の総務部と足並みを揃えて計画を公表していかなければならないため、私たちだけで検討を加速化するわけにはいかないもので、なかなかスピードアップを図れていないというところです。
　明後日、検討会議を開いて、北村会長から説明がありましたように、増築部分をどうするのか、部屋をどうするのかという議論をもう少し深めたいなと思っています。
【北村会長】
　今後のスケジュール感に関しては、前回の検討会議で、他の委員から「スケジュールをきちんと出してほしい。」という意見もあったところです。現在のところ、今年度中に基本計画を作るというところまでは決まっていて、今はもう８月ですから、あと半年あまりで「ここが、このような形になります。」という具体的なイメージができなければいけないので、その予定で議論を進めているところです。
　「こんな部屋がほしい。」、「ここをこうしてほしい。」といった意見は、恐らくたくさん寄せられていると思うのですが、それが全部実現するわけでもないですし、そもそも実現できないこともあるという状況です。
【中井委員】
　もう言っても無駄という感じでしょうか。
【北村会長】
　本当は、新設して理想とするスペースを100パーセント作れたら良いのですが、基本構想の段階で改修・増築という形で決まっているので、その方向性で進めているということです。もちろん、意見を言うのは無駄ではないと思いますし、今も、一生懸命意見を言っているところです。
【中井委員】
　今日、協議会の前に２階のカフェに行ってきました。東側に知事公館が見える窓があって、知事公館の庭の並木と青空が見えて、その部分は、とても景色が良かったんですけど、その手前に結構広い空間がありますよね。あの空間は、コンクリートがむき出しになっていて、すごく殺風景で、もしカフェがあのまま残るのであれば、あの見栄えはないなと感じたんですよね。ただ、カフェが別のところに移動し、あの空間がガラス張りのままで残るのであれば、そこに何か増築できるのかなとも思っていました。
【浅野文化財・博物館課近代美術館整備担当課長】
　カフェについては、非常に大きな議論のポイントになっていて、まず、２階のあ

の場所にあって良いのかという問題があります。特に、常設展を観る方は２階に上がるので、出口からカフェが見えるのですが、特別展を観る方は、１階で入退場するので、２階まで上がっていこうという動線になっていません。このため、できれば１階に置く、もし１階に適当な場所がなければ、増築した方が良いのではないかという議論をしています。

あと、もう一つ問題があり、カフェには営業するために水道が引いてありますが、その下が展示室になっています。展示室の上に水道の配管が通っていると、もし何かあれば、展示室が水浸しになってしまいかねないので、そもそも展示室の上に水場があること自体、駄目なのではないかということがあります。

そのようなことを考えた上で、我々の目指すビジョン、ミッション、コンセプトから見て、どこにあるのが良いのかを検討していて、現在の建物の中に収まるであれば、それはそれで良いですし、どうしても駄目なのであれば、増築も考えなければならないといった観点で議論しています。

【北村会長】

私の主な主張は、展覧会を観て、ライブラリーがあって、カフェがあって、ショップがあってという動線をきちんと作って、人が流れてほしいというものです。今は、美術館に入ると、右側が特別展示室、左側が常設展示室になっていて、二つの別々の美術館があるような構造になっています。それでは、特別展を観た人は、なかなか常設展に行かないので、左右の展示室をつないで回れるようにしたいと思ったのですが、「それは構造的に無理です。」と言われてしまいました。

【中井委員】

それは、建物の形を維持したいと思うから、構造的に無理ということでしょうか。

【北村会長】

壁を抜けないということでした。

【長谷川委員】

以前、特別展と常設展を一緒に続けて観るのは、なかなか難しいという話をしました。それは、どちらもボリュームがあり、見応えがあるからで、これから観覧者を集めていかなければならない、リピーターをもっと増やしていかなければならないという観点で考えたときに、常設展だけでも人を呼べるようであれば、特別展と常設展を一緒にぐるっと回ってもらうのではなくて、特別展と常設展が別々に観覧者を集めるような形でも良いのではないかと考えていました。

なぜかと言うと、最近の常設展は、そのような展示が多いからで、例えば、昨年度開催した「1945-2025 美術館は何を記憶しているか」は、テーマ性があって、美術通の人でなくてもとても楽しめるものだったと思います。先ほども話題に出ていた「ハロー！ミュージアム」に参加した世代が親になった頃、「昔から今までの流れってどうなんだろう。ちょっと面白そうだから観に行こうかな。」と言って美術館に来るような、そういったテーマ性のあるものであれば、常設展で観覧者を集められるのではないかと思っていて、周遊しなくても、特別展を観たい人は特別展を観て帰ってもらって、常設展だけを観に来る人が増えていけば、全体の観覧者も増えてくるのではないかなと思っていました。

また、近代美術館の常設展と三岸好太郎美術館の共通券がありますが、近代美術館の帰りに三岸好太郎美術館に行く、また、その逆というのもあるのかなと思うので、今までと同様、そこは残しておいてもいいのではないかと思っています。

最近の常設展は、とても魅力的だと思いますし、令和６年度（2024年度）の「星の瞬間」も、すごく印象に残っています。「学芸員の方々の仕事って何だろう。」と考えたときに、展覧会を考えることだとずっと思っていたのですが、「星の瞬間」では、研究成果が人々の目の前に出てきて、それも、素人でも分かりやすいように目の前に作品を置き、変遷を目で見せてくれて、そこにテキストがあるというのがとても印象的でした。今後、もっと積極的に取り組んでも良いのではないかなとも感じましたし、このとても魅力的な見せ方だったことで、思いほか、多くの観覧者が来たのではないかなと思います。

また、「星の瞬間」は、北海道に特化していたことも良かったです。もちろん、エコール・ド・パリやガラスも素敵ですが、「北海道ならではのものが観たい。」という方も多いと思いますので、そういった特徴のあるものを開催すると、道民は動くのではないかと思っています。

今の近代美術館の形が残ることが良いことかどうかはともかく、私は、回遊できなくても良いのかな、常設展を観に来た人だけカフェなどでゆっくりできれば良いのかなと思っています。もちろん、カフェを１階にということは考えたのですが、カフェにだけ来て、帰るのであれば意味がないのではないかと思いますので、ゆっくり検討していただいて、滞在型で、いろいろと観ていただくようなことを考えていただきたいなと思います。

【北村会長】

そういう意見もあるということですね。

私も、特別展を観ると、途中で疲れてしまいます。今、多くの美術館では、途中でちょっとした休憩所があったりしますね。一度展示室に入ると、とにかく出るまでに全部観なければならないというのはどうかと思っていて、一度入館すれば、カフェに入ってもいいし、特別展を観てもいいし、常設展を観てもいいといったように、館全体を自由に行き来できるようになればと思っています。

【霜村委員】

飲食店は、水道や排水の関係があるので、位置が限られてくるのが難しいところです。テナントのショップが入ってくれないと持続性が保てないという問題もありますし、季節的に冬には利用者が入らなくて、運営者も大変だといったこともあります。

ただ、そういったことは、割り切る方法もあって、例えば、自由な空間を置いて、札幌市内や道内のおいしいパンや軽食をショップで買えるようにして、休憩しつつ、窓際でコーヒーを飲みながら食べられるようにするなど、完全な店舗ではない形にするという方法もありますし、土日に特化して、キッチンカーに来てもらうといったこともあると思います。平日には来館者が少ない時間帯もあり、冬場には来館者が少ないということも考えたときに、お店に負担が掛からない方法というのを念頭に置いてもいいのかなと思います。いろいろなイベントもできる自由な空間として

使いつつ、ちょっとした食事や飲み物を摂ることができて、少し休める場所にするという、考え方を切り替えた方法もあるのかもしれないと思います。

近代美術館や三岸好太郎美術館、文学館は、施設の老朽化でいつ何が起きるか分からない状態であることに加えて、なかなかリニューアルの話が進まず、数年後の特別展などの展示計画、イベント計画も立てられない状態で、職員の皆さんが現状のプランＡ、何か起きたときのプランＢ、そして、数年後の計画のため、二重、三重の労力を使って、これだけの事業を実施していることに、まず敬意を表したいです。

連携して物事を進めるというのは、難しいですよね。何かしら、主導的に引っ張っていくような中心的人物がいないと進まないのではないかと思いますので、本気で推進するのであれば、例えば、「教育委員会、近代美術館が覚悟を持って中心的に動く。」又は「知事部局がメインで動く。」といったことを決めてしまうなり、代表者が集う形で新たな会議体を作って、いつまでに何をするかを決めるなり、動かし方を早急に決めた方が良いのではないかと思います。

【北村会長】

そういう議論もあって、二つの組織がバラバラであったら、いつまで経っても動かないので、全体を統括するような組織を作った方が良いという話も出ていたところです。

【木村委員】

今の時点で、リニューアルオープンは、いつになる予定なのでしょうか。

【浅野文化財・博物館課近代美術館整備担当課長】

それ自体を今検討していて、年度内にお示しする基本計画の中で、スケジュールを明らかにしようと思っています。収蔵庫をどうするかということもありますし、50年経つ建物なので、本体の前面に増築する、しないにかかわらず、完全にリニューアルしなければなりません。そうなると、それ相応の工事期間が必要で、その中で完全休館しなければならない期間も発生してくると思います。

【長谷川委員】

休館は、資料に書いてある２年間ではないのですか。

【浅野文化財・博物館課近代美術館整備担当課長】

はい。工事期間全体の中で、最初の方は、全部を閉めなくても工事できるのですが、最終的に建物全体のリニューアルに取り掛かると、休館になるかもしれなくて、その休館が２年ということです。全体の工期は、基本計画を定めた後、基本設計に入ってきた段階ではっきりしてくると思いますが、昨今、建設業界でも、人手不足であったり、働き方改革で土日は必ず休んだりといったこともありますので、工事期間全体で見ると、それ相応の長さが必要かなと思います。

【吉崎副会長】

実は、札幌芸術の森美術館も、札幌市の計画で、何年か改修休館をしなければならないことになっています。札幌市も、近代美術館の改修と被らないようにと考えて計画していたのですが、近代美術館の計画がずれ込んできている関係で、下手をすると、札幌の美術館で大規模な展覧会を開催しない期間が１年、２年出てくるこ

とも考えられる状況になっていますので、早めに決めていただきたいです。
【霜村委員】
　そうなると、地方都市も含め、北海道内全体の調整になってきそうですね。
【吉崎副会長】
　そうですね。
【木村委員】
　先日、金沢21世紀美術館に行ってきたのですが、「本当に美術館のレストランなの？」と、びっくりするくらいレストランがすごかったです。たくさん人が並んでいて、入るのも大変だったのですが、意外と効率よく回っていました。
　今、日本各地の美術館で、「あの美術館のレストランがおいしいから、行きたい。」といったことが話題になってきていますが、今の近代美術館のカフェについては、いかがなものかなと思うところが多分にあるものですから、水回りのことなど、いろいろと考えていただき、美術館の謳い文句にするような措置を早めに取ってほしいと思います。
【北村会長】
　まだ、道民の方は、近代美術館がこのように生まれ変わるということをほとんど知らないと思いますので、「こんなに魅力ある場所に変わるんだ。」ということを、ぜひ、皆さんにも知っていただくことが大事だと思います。
　カフェにしても、レストランにしても、お客さんが全然来ない、採算が合わないとなると、すぐに撤退されてしまいますし、今のカフェにしても、ようやく入っていただいたようなカフェです。ぜひ、美術館が閉まっている月曜日でも人が来るような魅力のあるカフェ、レストランがここにあって、美術館にも人を呼び込んでくれるという好循環を作っていきたいですね。
【中井委員】
　そうなると、カフェ側のモチベーションもありますね。「我々がいるから、みんな絵を観に来ているんだよ。」というくらい、やり手のカフェが入ってくれると良いですね。
【長谷川委員】
　ただ、あまりにも高級なお店が入ってしまうと、そのような人しか来なくなり、余計に敷居が高くなってしまうのではないかと思います。「正装してこなくちゃ。」とか、「Ｔシャツでは行けないかな。」と思わせるのではなくて、もっと広がりを持たせて、子供連れの方などに来てもらうということを考えているのではないかなと思いますので、いろいろと難しいのかなぁとも思います。
【北村会長】
　マーケティングをしなければいけないですね。
【長谷川委員】
　工事の時期は、美術館側としては、新しい企画も手掛けられないので、例えば、取り組んでいる「おしゃべりデイ」の定着化を図るなど、これからより良くなるための実験の期間のような形になるのかなと思います。
　「この１点をみてほしい。」の壁に作品のテキストが書いてあるのですが、すぐ

側のベンチにもテキストが置いてあって、とても見やすいといったように、リニューアルに向け、気が付いたことにどんどん取り組んで、ウェルビーイングになるための努力をする時期と捉えていらっしゃるのかなと思いますので、この時期をうまく利用して、より良くなっていっていただければと思っています。

【北村会長】

近代美術館のビジョン、ミッション、コンセプトというのは、リニューアルした後に始まるものではないです。「ウィズ・キッズ」も既に取り組んでいますし、リサーチにしても、コラボレーションにしても、一歩ずつ、目指す姿の実現に向けて取り組んでいるところだと思います。リニューアル後には、みんながワクワクして、「こんな素敵な形になったのか。」、「美術館に行ってみよう。」「カフェに行ってみよう。」「レストランに行ってみよう。」となれば良いなと思っているところです。

また、ターゲットをどのようにするのかというのは、マーケティングの問題ですので、そこも十分に考えなければいけないかなと思います。

私が協議会の皆さんを代表して検討会議で意見を述べるわけでありませんが、いろいろと皆さんの御意見を聞いて、伝えられることをお伝えしますので、もし何かあれば御意見ください。今、伺ったことも十分参考にさせていただきます。

では、以上で本日の議事を全て終了いたします。委員の皆様、熱心な御協議、御協力に感謝いたします。

【議事終了】

事務局から、次回協議会の日程等の事務連絡を行い、すべての議事を終了。